

日常生活に「ていねい」を求めて ～音楽療法的活動から自己肯定感へのつながりを考える～

○盛満 美緒 羽原 しおり (久良岐保育園)

はじめに

本園では、10年前から主に幼児クラスで月に1度、音楽療法的活動を行なっている。歌や楽器などの音楽技術を向上させることを目的としている活動ではない。音楽療法士である講師を招いて音楽療法的活動を行なっている。各クラスの問題点等を事前に講師と担任で話し合い、音楽を使った活動を通して日常生活に還元しようというものである。各クラスの担任はこの活動を通して日常の子どもたちの姿を見つめなおし、各クラス活動を工夫するよう心がけている。

3歳児クラスは今年度より参加している。乳児から幼児になり、社会性や他児との関わり、物を大切にするなど自分を主体とした考えを大切にしていくなかで「できた!」という気持ちを認め、自己肯定感を育てている。その中で生活のあらゆる場面で起こるクラスの問題を挙げ、音楽療法的活動を通し保育への還元を努めている。今回は講師と担任の働きがけを通して実践前後の子どもの変容について報告していきたい。

研究の方法

平成27年度4月～12月の9回(30～40分間)の活動について、担任と講師で問題点、活動内容、変容などを検討する。

クラス概要(3歳児クラス)

男児 12名 女児 13名 計 25名

(手順)

- 1) 毎回活動後のクラスの様子、担任の取り組みを記録用紙に記入し、講師に提出
- 2) 講師は記録用紙を基に次回のプログラムを設定
- 3) 活動後午睡時間を利用し、講師、担任、主任で⑦当日の子どもの姿⑧次回までの担任の工夫点等についての話し合い

結果と考察

今回は書面の都合上、担任の取り組みについて報告していく。

《クラスの問題例》

- 1) 物を乱暴に扱う
- 2) 椅子を足やお尻でしまう
- 3) 食器の下膳時に音を立てて重ねる

《担任の取り組み》

- 1) プラスチックや木、陶器など異なる素材をぶつけ合わせてみて、音の違いを感じる
→強くぶつけた時の音と、そっとぶつけた時の音の違いに気づき、音を聞いてどちらの音が大きく物が壊れやすいか自分で気付く
- 2) 相手の気持ちになって考えられる(椅子を友だちに置き換えて同じ行為をする)
→自分が椅子と同じようにお尻で押されたらどんな気持ちがするか考える
- 3) 柔らかいボールで保育者と手の届く距離でのキャッチボールをする
→受ける相手のことを考え、どのくらいの強さで、どこに投げたら受け取りやすいか考える

《実践前後の子どもの変化》

- 1) おもちゃを片付ける時に遠くから投げ入れたり、音を立てて引き出しやドアを閉める姿
→陶器、プラスチック、木など素材の違いに気づき、強くぶつくと割れてしまう物と割れない物を知った。プラスチックのおもちゃが多いため、片付ける時には箱の所へ行く姿や大きな音が出ないようにドアを閉めるようになってきた
- 2) 早く次の活動に移りたく、音を立てて椅子を足やお尻で押して入れる姿
→自分が同じようにお尻で押され、嫌な気持ちになった事、痛かった事を感じ、椅子の気持ちになり考え、手で優しくしまうようになった
- 3) 友だちと話しながら食器を重ねようとして落としそうになる。食器を重ねた際、大きな音を立ててしまう姿
→1)の担任の取り組みにより陶器が割れやすいことが分かり、力の加減を意識するようになった。両手でしっかり持って音を立てないように置くよう注意をするようになった

今後の課題

保育者は、保育園という集団生活の中で、できていない事ばかりに目が向けられがちになっている場合が多い。しかし、子どもにそっと寄り添いいつも見守られていると感じられるように、「今日は○○してくれてたね。ありがとう」と大切にしてくれた感謝の気持ちを言葉にして子どもに伝えることが大切だと実感した。そこから子ども自身の自己肯定感、しいては人を信頼する力が育まれるように今後も支援をつなげていきたい。

はじめに

本園では、10年前から主に幼児クラスで月に1度、音楽療法的活動を行なっている。歌や楽器などの音楽技術を向上させることを目的としている活動ではない。音楽療法士である講師を招いて音楽療法的活動を行なっている。各クラスの問題点等を事前に講師と担任で話し合い、音楽を使った活動を通して日常生活に還元しようというものである。各クラスの担任はこの活動を通して日常の子どもたちの姿を見つめなおし、各クラス活動を工夫するよう心がけている。

3歳児クラスは27年度より参加している。乳児から幼児になり、社会性や他児との関わり、物を大切にするなど自分を主体とした考えを大切にしていくなかで「できた！」という気持ちを認め、自己肯定感につなげている。その中で生活のあらゆる場面で起こるクラスの問題を挙げ、音楽療法的活動を通し保育への還元に努めている。今回は講師と担任の働きかけを通して実践前後の子どもの変容に

ついて報告していきたい。

研究の方法

平成 27 年度 4 月～12 月の 9 回（30～40 分間）の活動について、担任と講師で問題点、活動内容、変容などを検討する。

クラス概要（3 歳児クラス）

男児 12 名 女児 13 名 計 25 名

（手順）

- 1) 毎回活動後のクラスの様子、担任の取り組みを記録用紙に記入し、講師に提出
- 2) 講師は記録用紙を基に次回のプログラムを設定
- 3) 活動後午睡時間を利用し、講師、担任、主任で㊤当日の子どもの姿㊦次回までの担任の工夫点等についてのふり返り

結果と考察

《クラスで取り組みたい3つの問題例》

- 1)物を乱暴に扱う
- 2)椅子を足やお尻でしまう
- 3)食器の下膳時に音を立てて重ねる

今回は講師の取り組みと、講師と担任の取り組みについて発表していきたい。

《講師の取り組み例》

・パペット人形「マリちゃん」との触れ合い。人形の身体を赤い三角の家におさめても足がとびだしているので、「これはどうか？」と自分の座り方への気付きとして問いかける。

→姿勢が崩れていることに意識が向き、自分の姿勢を見直すきっかけになる。

講「あらマリちゃん、そんな姿勢で座っているのかな？」

子「足を出して座るのがかわるいよね」
「なんか体が曲がってる」

講「本当だ。気をつけようねマリちゃん」





講「みんなはマリちゃんみたいにならないように気を付けてね」と腹話術で話をする。

1人ずつ回ってマリちゃんと優しく握手をする。
仲良しになり相手と触れ合うことで子どもの印象にも残り、意識しやすくなる。



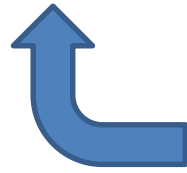
- ・鈴の音が鳴らないように隣の人に鈴を渡す。
→受け取る時、渡す時に鈴が鳴らないようにゆっくりと力の加減を考えて行なう。



講「優しくそっと持ってね。
他の人は音が聞こえないか耳を澄まして聞いていてね」

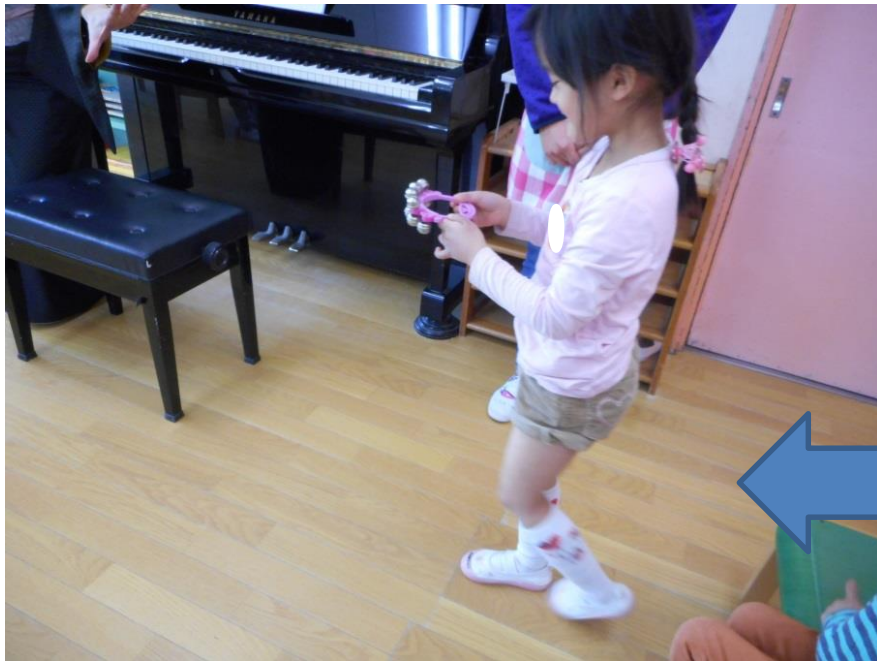
受け取る子や渡す子以外の子どもも注目して持つ。





始まりをお願いする子は保育者が意図的に選ぶ。

どうやって渡したら、どうやって受け取れば音が鳴らないか考えながら、隣の友だちに渡す。



最後の子どもは前にいる講師のところまで音が鳴らないように、ゆっくりと運んでいく。

《講師と担任の取り組み例》

- ・子どもの顔と同じくらいの大サイズの柔らかいボールを使用し、講師のピアノに合わせて保育者との近距離でのキャッチボールをする

→子どもが容易に受け取れ、ピアノの曲のリズムを意識できるように保育者はボールの投げ方に配慮する。



自分の番が回ってくるまで期待して待つ。

受け取る子どもは両手を出して受け取る姿勢になる。

担任は受け取る子どもと目線を合わせ、目が合ったらアイコンタクトで合図をし受け取りやすいところへ、優しく下から投げる。

(気持ちを通わせることが大切)



受け取る相手の気持ちを考えて相手が受けやすい強さや場所に向かって投げ返す。

《実践前後の子どもの変化》

実践前→姿勢が崩れてしまう姿が多く見られ保育者の話を聞く時も注意が散漫していた。離席する際の椅子の出し入れや給食の食器の始末を、乱暴に行い物を壊しそうになる場面が何度もあった。友だちとの会話の口調が強くなってしまい相手に圧迫感を与えてしまいトラブルの原因になっていた。

実践後→自分から話を聞く姿勢や物の扱い方（力加減など）を意識するようになり、自分以外のものを思いやる姿が見られるようになった。友だちとの距離感と声の大きさを考え、そのときに合った声の大きさやトーンを考える姿も見られる。

今後の課題

保育者は、保育園という集団生活の中で、できていない事ばかりに目が向けられがちになっている。しかし、子どもにそっと寄り添い、いつも見守られていると感じられるように、「今日は〇〇してくれていたね。ありがとう」と感謝の気持ちを言葉にして子どもに伝えることが大切だと実感した。子どもの行動を禁止・否定するのではなく、できたことを褒めて子どもの自己肯定感につなげ、やがては人を信頼する力を、自分はできる、自分は役に立つ存在なのだという力につなげられるようにしていきたい。